

## 第4章 発掘調査

### 第1節 天守台跡

#### 調査概要

天守台は城郭の中で最も高位置最深部に位置するのが通例であり、横須賀城もこの例にもれず、城の最東端に位置する松尾山を除いては最も高位置にあり、眺望がきくこと、城跡の中心となる部分であることから廃城以降も様々な利用がなされてきた。昭和に入ってからは昭和9年に中央に最後の城主西尾忠鶏の次の当主子爵西尾忠方による『横須賀城址』の石碑がたてられたのを始めとして、その後、遊具や東屋などが設置され公園化された。更に昭和30年代には天守台北側の土塁が削られて全体の削平拡張がなされ、中央に戦没者を慰靈する忠靈殿と呼ばれる建物が建てられた。

天守台跡の発掘調査は昭和59年度に天守台西側部分にトレンチが入れられたのが最初であり、本格的な発掘調査は平成元年度からである。発掘調査に先立ち、忠靈殿を移転するため町内の高台に同じような建物を建設し、天守台にあった忠靈殿から御靈を新しい忠靈殿に移した後、建物を重機で取り壊しながら発掘調査を開始した。なお、この忠靈殿は天守台に建てられたことから、高い石垣の上に城郭風の意匠を施した建物であった。このことから高い石垣が築かれている忠靈殿の一部に天守台の遺構が残されていることも考えられたので、取り壊し工事には町教育委員会の担当者が立会い慎重に進められた。その結果、忠靈殿内部は建物本体を支える数本のコンクリート柱とそれを埋立てる新しい



第31図 発掘区設定位置図

盛土によって築かれている事が分かり、盛土部分全体を重機で撤去した。その後は人力による表土排除と遺構調査が行われた。その結果、天守建物跡、天守台周りの石垣等の遺構が検出された。

この調査で横須賀城の天守台が特殊であることがあらためて確認された。横須賀城の天守部分について国立国会図書館所蔵の『遠州横須賀城図』を見てみると、天守の周囲は石垣がなく、もこもことした複数の瘤を持つ盛上状の部分に直接天守が建つように描かれていて石垣は見られない、横須賀城には天守の他に櫓状の高い建物としては太鼓櫓、西櫓があるが、いずれも建物の周囲はもこもことした不思議な描き方をしている。常識的に複数階の建物がもこもこした盛土の上に建てられるわけがなく、もこもことした瘤状の表現が何か特殊な状態を表しているのか、機密保持の意味からあやふやな表現で描いたのかもしれない。この表現方法はともかく、天守台部分に石垣が描かれていないことは意味が深い、横須賀城古図のなかには天守の石垣が描かれているものもあるが、無いものが多い、絵図からすると横須賀城の天守台には石垣が無かったことになる。今回の調査でも天守台周囲に低い石垣は見られるものの、高い石垣とその痕跡は検出されなかった。普通、天守は高い石垣積みの上に造られるが、天守あるはそれに準ずる櫓で石垣が見られない例としては水戸城の御三階櫓等がある。

今回の天守台の発掘調査で天守台自体が複雑な形状をしていることも判明した。当時の記録を見ると天守の周りには天守台上之門などいくつかの建物があった事がわかる。天守台の張り出した部分などにこれらの建物があったかも知れないが今回の調査では検出されなかった。

天守台の石垣の問題として、磐田市にある国指定の重要文化財『見付学校』の石垣が横須賀城の天守閣の石垣を使って造られたものだと広く語られてきた。このことについては、今のところ当町にも磐田市にもこれを証拠付ける記録は無いし、それを否定する証拠も無い。たしかに現在見付学校の石垣に使われている石は横須賀城で使われている砂岩質の丸礫と同じものであるが、見付のものはすこぶる大きい、『見付学校』は明治6年(1873)に見付町内の寺院を仮校舎として設立された。明治7年1月校舎を新築する事となり同年10月に着手、明治8年1月11日に上棟式挙行、同年8月7日竣工した。『見付学校』の石垣は玄関部分で高さ220cmを計る。横須賀城は明治6年1月18日に石垣建物等すべてが入札にかけられ払い下げられた。『見付学校』の石垣工事は明治7年中になされたと考えられる。したがって、横須賀城の廃城の翌年で時期がほぼ合う、これだけの量の自然石の巨石を短期間で採集するのは難しいので、やはりまとまってあったものを転用したと考えるのが妥当のように思う、その時一番可能性が高いのが横須賀城であろうが、残念ながら確実な記録はない。

以下各遺構について述べる。

#### 礎石建物跡

天守台跡の南西部分において、建物の礎石と考えられる据石と、礎石の抜き取り痕と考えられる浅い掘り込み、及び据石の沈下移動を防ぐ根石の集石群を検出した。礎石と礎石抜き取り痕群は若干のずれが見られるものの、各々の中心から中心で、約200cmの間隔で碁盤目状に規則正しく並んでいる。この柱間200cmは、京間の1間=6尺5寸(195cm)に対応していると考えられる。

据石は8個残り、抜き取り痕と集石は19カ所確認できた。東西(桁行)方向が柱跡7個つまり6間(12m)、南北(梁行)方向は西側で柱跡5個、三間半(7.25m) 東側で柱跡3個、2間(4.15m)が残り、この範囲に整然と並んでいる。この礎石群は天守台にある大規模な建物跡であることから、横須賀城の天守の礎石群であると考えられる。

礎石群のうち東から2列目の最前列部分には礎石ではなく、抜き取り痕も見られなかった。また西から3列目の南から3列目部分は全体に礫が分布していて、礎石や根固め石、抜き取り痕は確認できなかった。特に南東隅の2列目は痕跡も見られないので、礎石が当時もなかった可能性も考えられる。

J  
I  
H  
G  
F  
E  
D

8

9

10

11

12

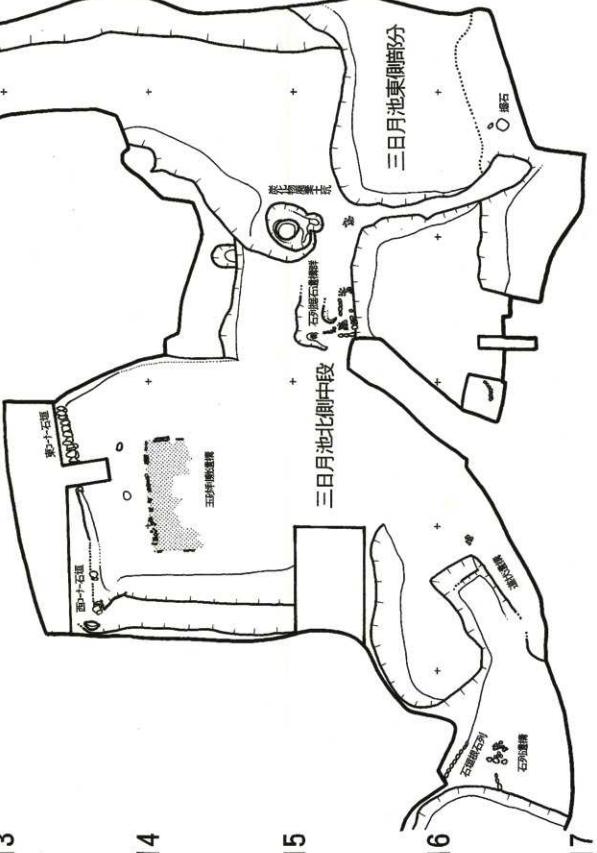
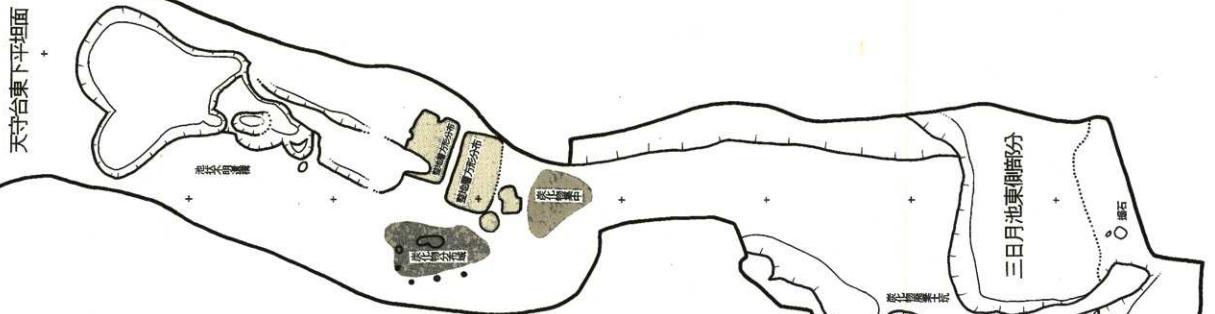
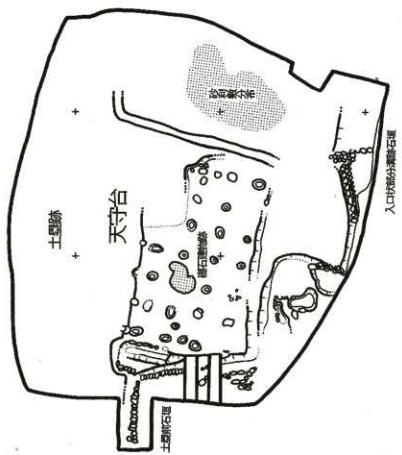
13

14

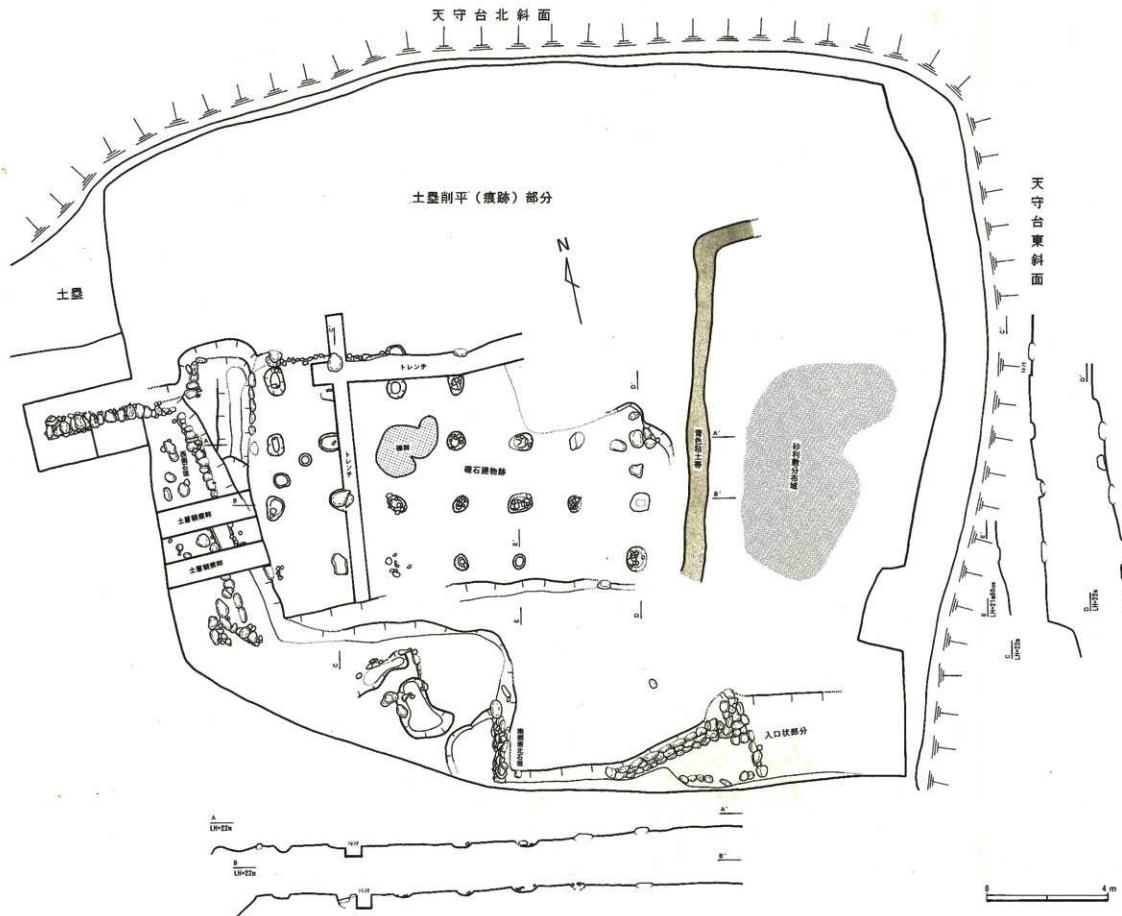
15

16

17



第32図 発掘区遺構全体図



第33図 天守台造構図

礎石に使われている石は地山を形づくる小笠山疊層中に見られる長径 60 cm から 80 cm 内外の大きさの、灰茶褐色の緻密な砂岩の川原石（玉石）である。石質は石垣に使われているのと同じものであるが、上面に柱が乗ることから偏平な石を用いている。東端列の南から北に 2 個目の礎石には偏平な石の表面に方形の柱の痕跡がうっすらと白く残っている。その痕跡は一辺の長さが 30 cm を計る。このことからこの礎石の上には 1 尺角の柱が乗っていたであろうと推定できる。

礎石は抜き取り痕の観察から、緻密に固結した小笠山疊層を 10 cm から 20 cm ほど掘り下げた堀り込みに若干の根固め石を使い据えていることがわかる。

礎石の痕跡のうち堀り込みがはっきりせず根固め石のみが見られるものが 2 か所みられる。そのうち南西隅の集石はその下部から長さ 50 cm 程の偏平なチャート質の角礫が顔を出している。この集石の位置は天守台の南西隅部分にあたり、天守台の端の上場ラインまでわずか 40 cm 足らずしかなく、前に述べたようにチャート質の石の一部が天守台の側面に露出している。このことからこのチャート質の石は石の形態は礎石に適した偏平な石ではあるが、礎石ではなく、基盤層の安定の悪い天守台の端部にあって、礎石の沈降移動を防ぐために礎石の下に支い込んだ支い込み石と考えられる。

礎石建物跡全体は東西で 20 cm ~ 40 cm 南北で 64 cm の高低差があり東北隅が最も高く南西隅が最も低い形に傾斜している。不等沈下によりこのような傾斜が生じたとの意見もあるが、基盤はしっかりしている事と、東北隅から南西隅にかけて一様に傾斜している事などから当初からこのような傾斜があったと考えられる。

最前列礎石列の中心から前面に 60 cm の位置に、10 cm 程度の若干の段差が見られる。礎石建物の南側を区切る区画線ではないかと考えるが、高低差も若干しか残らずほとんど見られない部分もありはっきりしない。

礎石群の北側は礎石建物跡面から 30 cm ほど高くなった段差があり、礎石および抜き取り痕は見られなかった。この部分の西側には天守台建物面から 180 cm の高さまで盛土がなされ土壘となっている。昭和 30 年代まで、天守台の北側には西側の土壘とつながって天守台北側をめぐる土壘があったが、昭和 30 年代の忠靈殿の建設の時に、この部分の土壘が削平され前面に敷きならされたとの多くの証言がある。このことから礎石建物跡の北側の高まりがその土壘の痕跡と考えられ、当時は西側の土壘と同じ程度の高さがあったと考えられる。この盛土（土壘）は礎石群の東側部分で前に張り出していく、この上面には礎石が見られない、つまり東から 3 列、南から 3 列目以北の 1 間半、数にすると 6 個の礎石が少なくなっている。なぜこのように土壘の中央が前に張り出し、そこに礎石が据えられなかったのか、建物跡が不正形な形となるのか大きな疑問点である。土壘の構築時期と天守建物の建築時期ははっきりしないが、土壘の方が古いと考えられている。普通、後で建物が作られたなら、建物を建てやすいように張り出した土壘部分は削られると考えるがその形跡が見られない、このことからすると、この部分には建物が及んでなかつたか、あるいはこの張り出し部分になんらかの役割を求めていたのかもしれない。この部分に建物が及んでいなかつたとの考え方の一つとして、西側 4 列と東側 3 列で建物の構造用途が違うのではないかとの考え方もある。西側の礎石群のまとまりが本体建物で、東側の礎石群のまとまりは付け槽状の付属施設ではないかとの考え方であるが結論は出ていない。

礎石群は土壘の痕跡と考えられる高まり部分で途切れていますが、その北側の土壘上に建物がおよんでいたかいかなかったかは天守台の構造解明する上で、解決しなければならない大きな問題である。土壘部分が 1 m 以上も削平されて痕跡がみられない状況では結論を下す事は難しいが、しかし、この問題の解明の糸口となる考え方がある。それは西側 4 列の礎石列の並びを見たとき、南から 3 間目の礎石の次の礎石が、それまでの間隔の約 200 cm ではなく、60 cm から 125 cm、平均で 104.5 cm つまり半間の

位置にあることである。また、この位置は土壘状の盛土の南の下場ラインにほぼ接する位置である。この礎石は南側の1間間隔と違う半間の位置にあることから、この礎石の上に乗っていた柱は通しの柱ではなく床下を支える東柱と考えられる。このことから、3間半で不自然に終わる礎石位置の意味が解けてくる。すなわち本来の1間間隔の4間目の柱が土壘にかかる形であったと考えると、3間目の柱と4間目の柱の間の床下は土壘の斜面となり、この部分の床は複雑で不安定であったと考えられる。そこで、土壘斜面部分の半間の位置に床を支える東柱を設けたと考えると、礎石配列の問題が解ける。しかし、天守の一部が地盤の良くない盛土の土壘上にかかる形で建てられて、本当にものかと言ふ疑問も残る。他の城の例では、盛土部分の下の安定した基盤に礎石を据えて柱を建て、柱に直接盛土が触れないように井戸のように柱の周りを石積で囲んだ掘立柱状の構造をとる天守の例があるようである。このような構造をとるのは、強風に対して構造上強くするためにだろうとのことである。横須賀城もたしかに風がそこぶる強い所である。この城は太平洋に面した高台にあり、またこの城から西は愛知県境の湖西連峰まで風を遮るものが多くなく、夏秋の台風、冬の偏西風ともに凄まじい風が吹き抜ける。そこに3層あるいは4層の天守があったのであるから、なんらかの対策は必要だったかもしれない。しかし、そのことから土壘上にかかるように天守が建てられたと単純に考えることにも無理がある。残念ながら、少なくとも今回の調査では土壘部分に礎石痕、掘立柱の痕跡は見つからなかった。次の問題として天守建物が土壘までかかっていて、天守の床下となる土壘南斜面に石垣が築かれていたかについてであるが、東柱が乗ると考えられる礎石のうち西端の礎石に方形の柱を半蔵したような柱痕が見られる。これについては、土壘側に築かれていた石垣をさけるため東柱の下部の土壘側を半蔵した半柱の痕跡であり、このことがこの部分の石垣のあった根拠との意見があるが、今回の調査では土壘斜面に巣石状の拳大の礎が若干見られただけで石垣の根石等の確証は得られていない事から判断しない、これらの事から少なくとも高い石垣はなかったと考えられる。

以上のように、天守が北側の土壘上に一部かかっていた可能性は高いが、北側に何間伸びていたかは想像するしかない、ちなみに、明治維新時の記録に天守橹の記述として、全体は4重で下重の建坪は40坪とある。この時の建物が検出された礎石建物に対応するとすれば、北側の土壘上に更に3間分の柱を想定するとこの記述にあってくる。

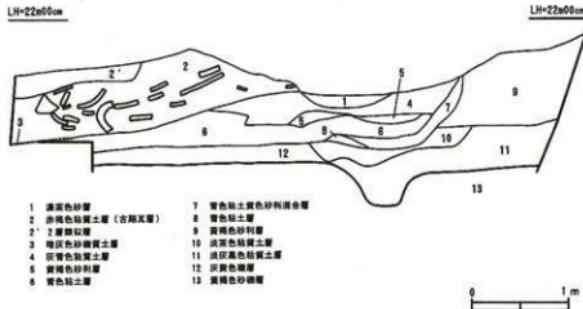
#### 青色粘土帶および砂利敷平坦面

天守の東端の礎石列に沿うように、青色粘土の帯が見られる。粘土は水田耕作土の下に見られるような灰青色の土層であり、砂も多少混じる。また、黄褐色の粘質土層を層状に挟む。この青色粘土帶(層)は石積みを抜き取った跡に粘土等が堆積した、あるいは、雨落ち溝に堆積したもの、あるいは雨落ちによる加湿状態から土層が還元状態になったために形成された還元粘土層ではないかなどの指摘もあるが、土層を観察した限りでは、前述したとおり、層状、版築状の構造が見られる事、法面状の構造が見られる事などから、変色等により形成されたものではなく、沖積平野中の青色粘土を探掘して持ち込み、何らかの目的で構築されたと考える。

この青色粘土層は土層観察によると、天守の東端の礎石列からほぼ60cmの間隔をおいて東に落ち込むような形で次第に下がり、水平に分布している。表面に露出する面の巾は60cmから70cmほどである。青色粘土層は水平に分布する部分から径3cm~4cmほどの砂利を含むようになり、更に東では砂利だけになって、天守の東側の平坦面一面に広がっている。

この結果から天守の東側は、この青色粘土帯が形作つくる法面の段差により区画され、さらにその外側に砂利敷舗装がなされた広場状の平坦面がある構造が見えてくる。

青色粘土帯が形作つくる法面の段差の位置は、礎石群の東端列を建物の東の柱位置と考えるとちょうど



第34図 青色粘土帯層図

ど屋根の端部分にある。つまりこの青色粘土帯の部分は建物の軒下の雨落ち部分にあたるわけである。通常この部分には雨垂れを受ける雨落溝のような施設が設けられるのが普通である。調査で検出された青色粘土の法面だけでは、天守から落下する多量の雨垂れを受ける事は到底出来ない。この事から、当時はこの青色粘土の法面は敷石や石積み等で覆われていたのではないかと考えられた。そこでこの青色粘土帯を分断するサブトレーンチを入れ石積み等の痕跡を探ったところ、北側のトレーンチで礫が出土したが、石積みの根石と判断できるような据石ではなく、石積み等があった証拠は得られず判然としなかった。

この青色粘土帯は北側で東へ曲がる形になっている。前にも述べたが天守台北側の土塁は天守台の東端まで達していたという複数の証言がある。そうであったとすると、当然、青色粘土の法面は北側で土塁と接していたわけであり、このことから、この東へ折れ曲がった青色粘土帯部分が土塁の南法面を形づくっていたと考えられる。

#### 赤褐色整地層と古期瓦廃棄層

前に述べた青色粘土の法面と、砂利敷の広場状部分を埋める形で赤褐色の土層が覆っている。この土層は多量の瓦を含んでおり瓦廃棄層と考えられる。この土層中にみられる瓦群は、平瓦、丸瓦を主体とし、文様がついた軒平瓦、軒丸瓦も見られる。今回の天守台の発掘調査に先立つ昭和63年度の本丸跡と北の丸跡の発掘調査において、天守台北側法面下で検出された時期差がみられる石列遺構と石積み遺構のうち、下層から検出された石積み遺構を形づくる整地層中にみられる瓦群と本丸跡平坦面の土坑から出土した瓦群が同じタイプの瓦群であり、それまでにおこなわれた本丸西側部分の調査や史跡の現状変更でおこなわれた二の丸等の平城部分の調査ではほとんど出土例のない文様をつける一群の瓦であり、棟瓦や家紋瓦を含まないことや、出土土層と同伴遺物から古い時期の瓦と考えていた。今回出土した赤褐色整地層中の瓦もこれらと同じ模様、同じ組成を示している事から、古い時期の瓦であるとは考えていた。その作製時期、廃棄時期については、城主の家紋瓦がみられないことから、横須賀城の家紋入り瓦の上限と考えられる立葵文を家紋とする12代城主本多利長が横須賀に入封した正保2年(1645)以前に作られた瓦と考えていた。しかし、それ以上の時期の特定はできずにいたところ、織田、豊臣系の城郭を研究している織豊期城郭研究会の研究の中から、瓦製作技法の古いタイプであることが確認でき、更に他城郭の瓦と同種、同范と思われる瓦もある事が分かってきた。この事から他の城との比較が可能となった。その結果これらの瓦は慶長期以前の瓦であり、豊臣系の大名の

影響が強い事が判明した。横須賀城は天正8年に徳川家康の家臣大須賀康高により築かれた。2代城主大須賀忠政が天正18年関東へ移封となるまで横須賀周辺は徳川氏の影響下にあった。この移封は豊臣秀吉による徳川家康とその家臣團の関東移封に伴うものであって、この後、当方は東の徳川勢力を抑える要地として、豊臣系の大名が配置された。横須賀城には豊臣秀吉の甥、豊臣秀次に近い、渡瀬繁詮が入封し、次の城主有馬豊氏と2代10年間にわたり豊臣系の大名が続いた。前述したとおりこの一群の瓦は他の城との比較から、豊臣色が強いことがわかるので、当城の3代4代の豊臣系大名の時代につくられた瓦と推定できる。特に豊臣氏に近い4代城主渡瀬氏の時代に作られたものではないかと考えられる。

この一群の瓦は天守台とその周辺から出土している事から考えると、天守に使われていた瓦の可能性が高い。横須賀城の天守については、横須賀城下町の中心部に鎮座し、現在でも大須賀町の信仰の中心である三熊野神社の縁起と、横須賀城歴代城主の事について記された古記録『横須賀三社権現鎮座本記並御城主御代々』通称『横須賀三社縁起』の中の2代城主大須賀国千代（松平出羽守忠政）の項の中に「二代大須賀国千代八才にて家督相続あり後松平出羽守忠政公と号す此御代に天守を建つ城の表向敵土手の上小蔵にて堀も水なき搔上げ堀なり谷口通りに侍町を立て城前に片平町も建ち石津侍町立ち・・・後略」とある。前述したとおり松平忠政は天正16年（1588）に2代城主となり、天正18年（1590）に関東に移り、関が原の戦後の大名再配置により慶長6年（1601）再び5代城主として横須賀に戻り、慶長12年（1607）に亡くなるまで城主でいた。横須賀城の天守はこの資料から大須賀（松平）忠政の時代に創建されたと考えられてきた。また、2代城主でいた時代ではなく5代目として関東から戻ってきた慶長6年から慶長12年の間の事だろうと言われてきた。しかし前に述べたように天守台等で検出される古期瓦の分析から、その起源を豊臣系の大名が城主でいた時代にとめる考えが強くなってきた。

この古期瓦と天守等の考察については、横須賀城にとって重要な事柄なので織豊崩城郭研究会の加藤理文氏にご寄稿いただき、この報告書の別項で詳しく述べていただいている。

#### 天守台西北隅石列と石組みおよび瓦溜まり

天守礎石跡の西北外側で石列と瓦溜まりを検出した。石列に使われている石は長さ40cm程の小笠山礎層中に産する緻密な砂岩の細長い丸礎を使っている。石列の全体の長さは200cmで5個の石を据えてつくられている。5個の石は東側の礎石建物跡に平行するように、南北に石の長軸が石列の延長線方向に平行に据えている。また石の西側面つまり建物跡からは外側になる石面に、礎の直線的な面や割れ面を描えている。東面は石の丸い面や角張った面が向いて面が揃っていない、この事から、この石列は造構の西側を意識してつくられている事がわかる。

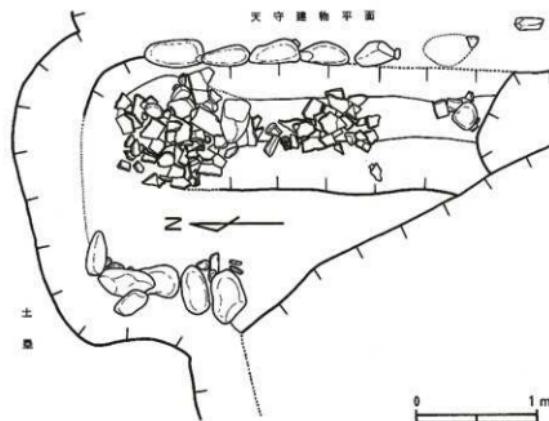
この造構のすぐ西側には石組み状の造構がみられる。石組みは東側の石列と同じ小笠山礎層中に見られる砂岩質の6個の丸礎を使い、東側の石列に延長が平行するようにつくられている。石列と石組みの各々の間隔は160cmをはかる。二つの造構は対をなしている様に見えるが石の据え方は違う、また、石組み造構の6個の石それぞれの石の置き方も異なる。南から2個の石は造構の延長に対して直角の方向に東側を描えて据えられている。この据え方は石垣積みに見られる据え方であり、ある程度の高さの石積みがあったとも考えられる。その北側の石は偏平な面を上に向かって据えられていて、その上に偏平な石が、偏平な面が東側を向く形で横に立てて据えられている。この石の下にはこの石の沈降を防ぐために小振りの石が据えられている。この偏平な石の置き方からもこの造構の東の空間を意識して積まれている事が分かるが、石の上面には石の尖った側面があるので、この石の上に同じ形で高い石積みを積む事は不可能である。造構はこの偏平な石が北端となり更に東に直角に折れて、さら

に1石が偏平な面が南を向くように横に立てて据えられて終わっている。この状況からこの遺構は瓦が廃棄された細長い空間を取り囲む様につくられた石組み遺構で2段以上の石組みはあったが、高いものではなかったと考えられる。またこの遺構と遺構が形造る長方形の空間は天守台北側にある土塁に食い込む形でつくられている。この事からこの遺構は土塁より後につくられたと考えられる。またこの遺構を境にして土塁の幅がこの遺構から東側（天守北側）は西より狭くなっている。

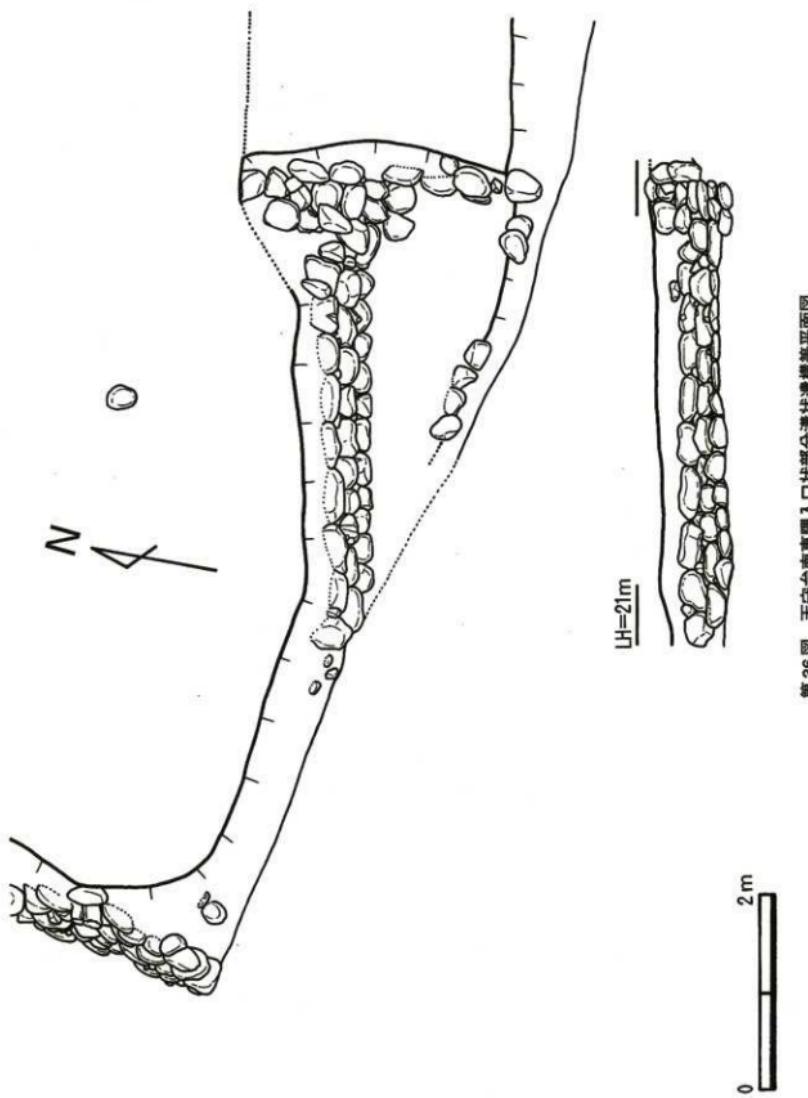
この遺構が形つくる長方形の空間はその方向性から天守建物に対応してつくられたと考えられる。またこの部分には廃棄された瓦が堆積していた。この廃棄瓦中には13代から最後の20代まで城主であった西尾氏の家紋である櫛松文が付いた軒丸瓦がみられる。櫛松文は櫛の歯が7本のものと9本のものがある。時期は特定されていないが、9本歯の方が新しい時期と考えられている。ここで出土した櫛松文は9本歯であることから西尾氏の時代の中でも後半に作成されたものと考えられる。この廃棄瓦層中には屋根等に使用されたと考えられる多量の漆喰がみられた。この瓦廃棄層は石列と石組み遺構が構築されている基盤層上に直接廃棄されていて、間に他の土層を挟まない。ただしこの後で述べる雨落ち溝部分には若干の堆積物が見られた。この廃棄瓦は天守台にあった建物、おそらく天守から近世中期以降に投棄されたものと考えられる。

天守建物に平行するこの長方形の平坦面について、検出当初は天守に上がる入口かと考えたが、瓦を取り上げて基盤層を出したところ、遺構面は一様に平らではなく東の石列に沿うように溝状の窪みが検出された。その位置は東の石列から中心で60cm、天守建物の西端の礎石列から約150cmに位置する。この位置は礎石建物の軒先部分にあたる。この事からこの溝は東にある天守の軒先から落ちる雨落ちを受ける雨落ち溝と考えられる。このような遺構の状況から天守台への入口ではないと考えられる。  
天守台東南隅入口状部分

天守台の東南隅で天守台への入口と考えられる部分を検出した。遺構は石垣と、東側の上り道に付属すると考えられる溝跡で構成される。



第35図 天守台西北隅石列と石組み瓦溜まり平面図



第36図 天守台南東隅入口状部分断面圖

石垣は全長4mをはかる。西側の高い部分で高さ50cm、東側の低い部分で40cmの高さがある。この石垣は特殊な形態で表込め栗石もみられないので石積みと言った方がいいかもしれない。石は小笠山礫層中にみられる長径25cmから55cmほどの大きさの砂岩質の丸礫で、偏平な石は見られず、ごろっとした丸礫にしては面が多い石を使ってつくられている。石積みは3段残る。各段の上面はほぼ水平に揃い、それぞれの段の前面も直線的に揃っている。そして石の上面が十数cmずつずれるように据えてあるので、石垣と言うより3段の石列による上り階段のような印象を受ける。しかし石の上面は踏み面としての間隔ではなく、面の形状も平らなものばかりではないので石段とは考えられない。更にこの石垣は若干ではあるが西で傾斜がきつく、東で緩くなっている。つまり、西側から東側にいくにしたがい扇を広げるよう3段の石列が広がっている。これは東に推定されるスロープ状の入口とその側溝に擦りつけるための構造だろうと考えられる。

この石垣の東で溝状の遺構を検出した。この遺構は全長180cmの長さが残る。遺構は小笠山礫層中に産する砂岩質の丸石を使ってつくられている。溝底の石は偏平な石を偏平な面を上面にして据えてある。溝の両側の側面は比較的ごろっとした石を使いつくされている。天守台部分の雨水等を前面(南)下の本丸平坦面に排水するための溝と考えられ、北が高く南に向かって下がっている。溝底の石の面で北と南で70cmの落差がある。溝底の幅は北側(上)では20cm、南(下)に行くにしたがい広がって南端では40cmの幅がある。また、北側では溝底の石が一つであるが南端の2列は2つ並べて据えてある。現状では180cmの長さしか残らないが、当時は更に北側の天守方面に向かって延びていたと考えられる。南側についても流末部分の溝の続きをあったと考えられるので、サブトレーンチを入れて探ったが接続する溝跡は、検出されなかった。

この溝跡の東側の側石は北側では1石が残るだけであるが、南側では溝が途切た部分からさらに南に120cmほど続いて、2段目の石が1石残り、当時は何段かの石積みがあった事が分かる。そして、この石積みにより、東側に張り出した部分が形づくられている。この張り出し部分に、南に傾斜して下がる溝が沿ってつくられている構造から、張り出し部分の上面は平坦ではなく、溝の傾斜にあわせるように南に緩やかに傾斜していたと考えるのが自然である。この形状を考えて、この部分の遺構全体を考えると、一番東側に天守台に上がるスロープ状の入口があり、これに沿う形で天守台の排水用の溝があり、さらにこの溝に取りつくように東側でだいに広がる3段の石垣があるという姿が描ける。  
天守台南側石垣と瓦溜まり

天守台の南側部分で延長が南北方向を向く石垣を検出した。全長3m30cmを計り、高い部分で7段110cmの高さが残る。使われている石は小笠山礫層中の緻密な砂岩の丸礫で、大きなもので長径60cm小さいもので30cmほどの石を使ってつくられている。石の大きさは不揃いで、石の形状も偏平な石が多く、偏平な面を上面に向け石垣としては不安定な印象を受ける。また全体の石が南下がりに傾斜するように据えられていて、石組がなされているというより、縦の1ブロック毎の石積みを重ねて全体がつくられているように見える。この石垣の前面(西側)には廐棄瓦が堆積した平坦面がある。この平坦面は天守台建物跡の平坦面から50cmから80cmほど下がったほぼ南北4m50cm、東西が7mの長方形をなしている。また、この平坦面は東北隅部分が高く南西隅に向かい低くなっている。この構造からある時期この部分に天守台に上がる入口があったのではないかとの意見もあるが、石段等の痕跡は見られずなんとも言えない。しかし、このように天守台の一部がへこむ不正形な形状をなすのは天守台の構造上必要があっての事と考えられるので、今後とも検討が必要である。

前述のとおりこの平坦面には廐棄瓦が堆積している。この中から天守に使われていたと考えられる鰐瓦の尾ひれ部分が出土している。この鰐瓦の尾ひれ部分は、後で述べる天守台西側で出土した鰐瓦

の頭部と鱗の表現方法などが同一であり、同一固体あるいは同じ時点に作成された一対の鱗瓦の一つではないかと考えられる。この廃棄瓦層中には、近世中期から近世末にかけて横須賀城の城主であった西尾氏の家紋である櫛松文を付けた瓦が多量に出土していることから、幕末に近い時期に廃棄されたものと考えられる。

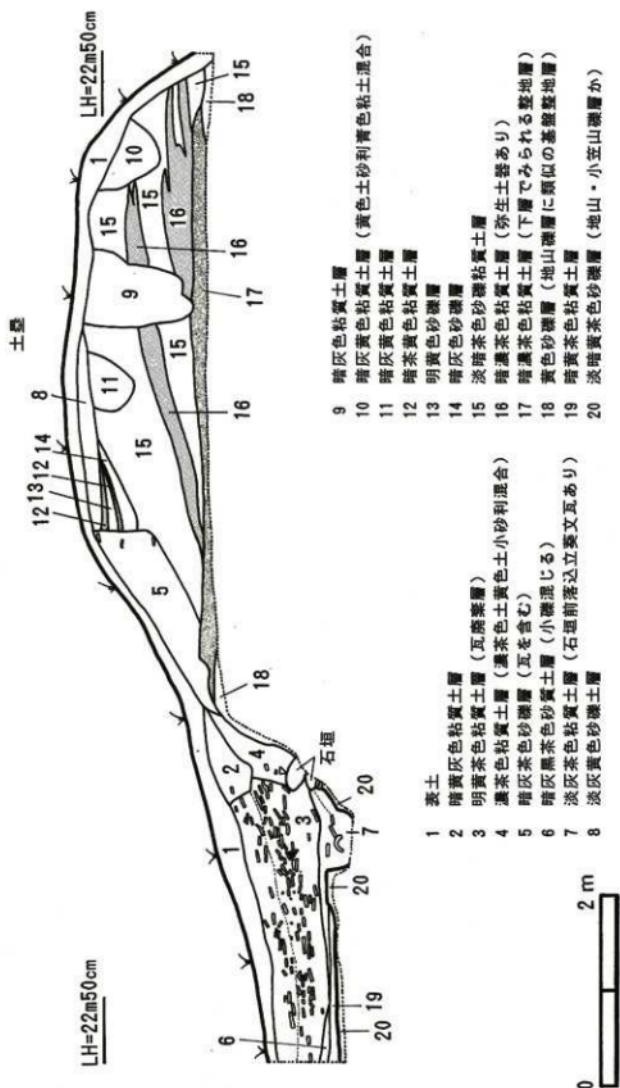
#### 天守台西側石垣

天守台の西側部分で天守台の周囲を取り巻く石垣のうち、西側面の石垣の一部が出土している。天守台西側側面は全長で約8mの長さがあるが、南側5mは栗石状の礫が斜面に若干みられる程度で石垣は失われている。北側では天守台の西側側面と天守台の西北に位置する土塁が形づくる隅角コーナーから南に長さ3m、残りの良い部分で3段積み44cmの高さの石垣が残る。石は長径40cmから50cmの細長く、ごろっとした感じで石垣積みに適した形の丸礫を、石垣の延長に対して石の長径方向が直角になるように据えている。現状では3段しか残っていないが、石垣の基盤となる天守台西側斜面は90cmの高さがあるので、少なくとも現状の2倍ほどの高さの石垣があったと考えられるが、天守台周りの石垣としては特例的に低い石垣である。この石垣の特徴的な点としては、今の石垣の並びで天守台斜面に沿って南端まで考えていくと、天守建物に対して方向が東に極端にずれて、南端で天守建物の西南隅の礎石と接してしまう、このため前の礎石建物跡の部分で述べたようにこの部分の礎石が西側に沈降しないように、礎石の下に支い込んだ大きな支い込み石が斜面に露出している。またこの石垣の構造について重要なことは、この石垣の中央部分に残る3段目の石積み4個が下段2段と延長方向が異なっている事である。この3段目の石の外面を南に延長していくと、この後に述べる南端の石積み列の延長にほぼきれいに接合する。この石垣推定線は前に述べた石垣推定線より南側で120cmほど西側に位置し、天守建物の方向に対しても平行している事から、天守建物に対応する石垣としてはこの石垣の方が、前に述べた石垣の方向より無理がない。これらの事から、最初天守建物に平行しない石垣があり、後年、3段目以上の石が天守建物に対応する方向に積み替えられたと考えるのが自然である。

次にその南側の石積み列について述べる。天守台西側の南部分に、天守台の西南隅コーナーの痕跡と考えられる石列が見られる。内側と外側と2つの石列が隣接して残る。外側（西側）の石列は2石が並ぶのみであり石垣の根石と断定して良いか疑問が残る。しかし、内側（東側）の石列は全長2m20cmを計り8個の石を使い一部2段目の石も残る。この事から石積みである事がはっきりわかる。この石積み列は北側2石目の石の曲がりを利用して、この石を含め5石が東向きに方向を変えて並べられている。全体が天守台側からみて外側を意識して積まれ、天守台のコーナーに合わせるようにカーブを描いている。またこの石積みの北側の外側線を北側に延長すると、前述したように北側の天守台側面の石垣の積み替えられた石垣方向に接合する。

この他この部分では天守台西側側面から約40cmの幅をもって並ぶ石列を検出した。途中抜けた部分はあるものの南側で約2m80cmの長さが残り、途中石が無い部分を含めると北側からの全長は約6m40cmを計る。この石列は長径30cmから50cmほどの偏平あるいは細長い丸礫を石の長軸を石列の方向に合わせるように据えてつくられている。この石列は石の東面（天守台側）が直線に揃うように据えられて、この石列と天守台西側側面の石垣との間には約40cmの間隔の溝状の構造が考えられる。このことから、この石列は、天守台西側に沿う側溝の西側の縁石としてつくられた石列の一部と考えられる。**土壘前石垣と瓦溜まり**

天守台西北の土壘の前面部分で石垣を検出した。全長は4m30cmを計る。石は長径40cm～50cmの小笠山礫層中に見られる緻密な砂岩の丸礫を使っている。石の据え方は石垣の延長線に対して石の長



第37図 天守台西側土壌石垣瓦砾層土壌図

軸が直角になるように据えられている。石垣は高い部分で5段積み61cmが残る。石垣の東端は前に述べた天守台西側面の石垣と隅角を形つくるが、軒先な角部分が1石分12cmほど空いて完全には接していない。このことから、同時期に構築されたのではなく、別々の時期に作られた可能性が高いのではないかとの指摘もある。またこの石垣は西端で明確な出隅角をつくっている。この石垣の全体の石の据方は前に述べたように、石垣の延長線に対し石の長軸が直角になるように据えられているが、出隅角部分は根石となる下段の石は延長線に対し平行するように据えられている。この上に乗る2段目の石は西側を意識して延長に対し直角に積んでいるので、この2石で出隅角が形づくられている。さらにその上に乗る3段目4段目の石はこの2段目の石に直交するようつまり石垣の延長に対しては平行するように積まれている。この石垣は土壘の下部に構築されていることから土留のための低い石垣と考えていた。したがって、石垣の西端がこのように明確にしかも土壘から張り出すように終わっているは予想外であった。そこでこの石垣に土留め以外の目的が考えられるのではないか、特に石垣の積み方と構造から、この石垣がさらに北側の土壘中に統いて、この石垣による方形の平場が形づくられ、天守の附櫓のような施設があったのではとの指摘もあった。そこで北へ方向を変えた石垣が土壘の中に及んでいるか、掘削してみたが石垣が更に北側に統いている痕跡は認められなかった。このような遺構の状況から、やはりこの石垣は北側の土壘の土留めのための低い石垣と考えたい。

この石垣の前面（南側）には廃棄された多量の瓦が堆積していた。この瓦の中には古い時期のものも含まれていたが、前に述べた西尾家の家紋である櫛松文入りの瓦が含まれる事から、幕末に近い時期に廃棄されたものと考えられる。前に述べた天守西側と南側の瓦溜まりの瓦と構成がほぼ似通っているので同じ時期に廃棄されたものと考えられる。西尾氏が城主でいた期間は天和2年（1682）から明治元年（1868）の186年間に及ぶので、具体的な時期については判断としないが、西尾氏が城主の時代には、宝永4年（1707）の宝永大地震や暴風雨等の災害に度々みまわれている。幕末期には安政元年（1854）の安政大地震や安政5年には天守に雷が落ちて天守各層に被害がおよび鰐も砕け落ちたとの記録が残る。特に安政大地震では城内も大被害が出ている。度々紹介されている文書であるが、西尾家文書の『忠受公御記録稿』の中の安政大地震の被害状況を幕府に報告した部分の内、本丸郭の被害状況を紹介する。

#### 城内本丸之分

一 長陣門	破損	一 同所番所	大破
一 同西門	潰	一 御用米蔵	六棟潰
一 天守	破損傾	一 用米蔵	壱棟潰
一 天守臺門	潰	一 武器蔵	壱棟潰
一 宮 式ヶ所破損		一 石垣	不残崩
一 宮門	破損	一 囲塀	不残倒
一 山ノ手門	潰	一 三日月堀石垣玉縁共	落崩
一 御用米蔵門	潰	二丸之分	
			以下略

以上の様にこの地震で横須賀城は甚大な被害を受けた。天守台でも各建物が大きな被害を出し、天守自体も破損して傾いてしまった。したがって修理や建て直し等に伴い、多量の廃棄瓦が出たと考えられる。多量の廃棄瓦が建物周囲に廃棄されたままで出土している事を考えると、明治6年の魔城取り壊しの時の廃棄瓦の可能性もあるが、この地震当時の状況を考えると、幕末の財政窮乏期で城を完

全に旧状に復原する事が難しく、廃棄瓦も近くの窪地に打ち捨てられ埋め立てられた可能性も十分考えられる。その根拠の一つは、この廃棄瓦層の下層から出土した天守大棟に乗っていたと考えられる鰐瓦の頭部が、町内の恩高寺に残る鰐瓦との比較から、安政以前に作成されたものではないかと考えられることである。同寺には鰐瓦が2種類3体残るが、いずれも今回出土した鰐瓦とは鱗の表現方法等が違っている。同寺の3体の内、対を成す鰐瓦には作成年代が書かれている。それによると安政3年に、城の北方の三輪村の瓦師山本塙左衛門によってつくられたことがわかる。安政3年は言うまでもなく安政大地震の直後である。したがって、この寺の鰐瓦が地震の後の天守の修理時に作成され、明治維新的廢城時に天守から下ろされ同寺に伝世したと考えると合点がいく。したがってこの瓦溜まりから出土した鰐瓦は西尾氏が城主であった時代で、安政3年以前に廃棄されたと考えると、この安政の大地震の時に廃棄された瓦である可能性が高いが、前に述べたように安政5年に天守に雷が落ちて天守各層に被害がおよび鰐も碎け落ちたとの記録もあるので、今後の検討が必要である。

#### 天守台土壘

天守台の西側に残る土壘は建物面から180cmの高さが残る。この土壘は、昭和30年代の忠靈殿建設の際東側が削り取られ天守部分で途切れた形となっていたので、この切端面を精査し土層の観察をおこない土壘の構築状況を探った。下層への掘削は深さが限られたので明確な地山層までは検出されていないが、基盤に近い下層には黒色土層が水平に堆積し、その上層には黒色土と黄色土が層状に、南下がりで堆積している。版築とまでは言えないが、異質の土を交互に重ねて叩き締める方法は整地層をつくる時良く見られる方法である。また、ピット状の掘り込みが3箇所にみられる。当時の絵図を見るとこの土壘上には堀が描かれている事から堀に使われた柱の柱穴の可能性が考えられる。

## 第2節 三日月池北側中段部分

### 調査概要

この部分の発掘調査は平成5年度に三日月池北側直上の通路状部分の調査を開始したのに始まる。その後、平成7年度8年度に、その東側と北側の発掘調査を進めた。当時の絵図によるとこの部分は東大手から三日月池の北側を通り本丸前の櫓門前に至る通路状部分にあたり、門が描かれている。また、天守前の本丸南斜面には石垣が描かれているので、これらの検出を調査の目標にした。

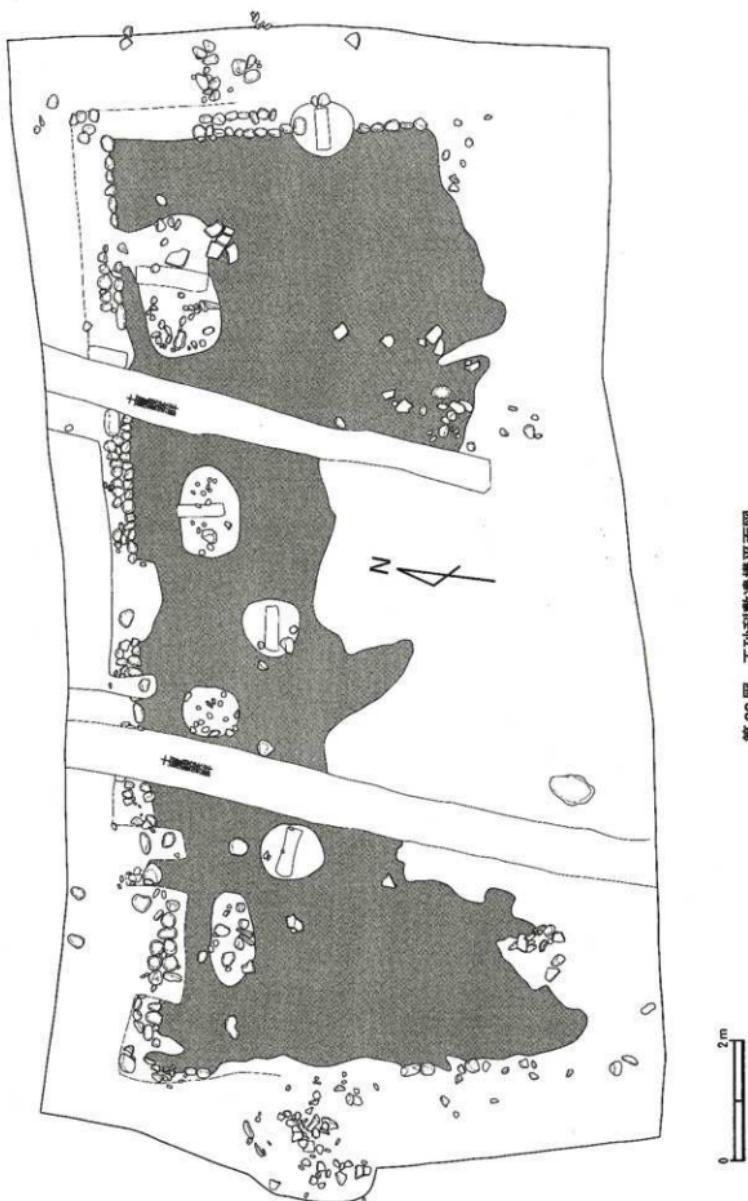
### 三日月池直上の道跡

三日月池北直上の東西に細長い平坦面で、東大手から本丸前の櫓門の下に至る道跡の一部を検出した。遺構は東側の一段高い部分から、本丸前の櫓門下の一段低い平坦面をつなぐ西下がりの斜面部分にあり、西側と東側は削平されて全長は4m程度しか残っていないかった。遺構は西下がりの斜面の角部分に当たる。その角部を削って道をつくるため、道の両側に斜面ができる低い切通状になっている。道幅は2m、両側の斜面を含めた幅はほぼ3mである。道は緩やかに西に下がっている。この道跡の直上からは、丸瓦と堀に使われた平瓦が廃棄された状態で出土している。当時の絵図をみるとこの道状部分の両側には白壁の堀が描かれているので、この堀に使われていた瓦が道跡に投棄された状態と考えられる。また、この絵図を見ると、道を西側に下った部分に小規模な門が描かれている。今回の調査で明確な門跡は検出できなかったが、推定される部分付近に斜面に対して（推定される道に対しても）直角になるように3個の石が据えられて石列をつくっている。この石列が、この門跡の一部を形づくるのではないかと考えられる。

### 石垣根石列

門跡の一部と推定される石列の北側斜面（平成3年度4年度本丸前発掘調査概報で櫓門東側舌状台

第38圖 玉砂利散播場平面圖



地と呼ばれている張り出し部分の南斜面)下場部分で石垣の根石列を検出した。この根石列は平成3年度4年度本丸前発掘調査概報で遺構16とよぶ石垣根石列に続く遺構である。この石垣は石の偏平な面を表側に出すように、一見すると斜面に石を張りつけたように見える。また、この根石列の東側は道状部分が東に上るのに合わせたようにしだいに上がっている。

#### 玉砂利敷遺構

天守台前の本丸斜面下、三日月池北側の谷状部分の平坦面から、玉砂利を敷きつめた遺構を検出した。東西7m75cm、南北は西側で3m50cm、東側で2m60cmの範囲一面に玉砂利が敷きつめられている。多少のばらつきはあるもののほぼ直径4cmほどの玉砂利を敷きつめている。玉砂利は黒色で碁石のように偏平で緻密な砂岩質の丸礫である。この種の礫は小笠山礫層中にはあまり見られず、海岸の波打ち際や沖積層の砂層の中に見られる礫である。当方では小笠山礫層中にみられる灰茶色の礫を死に石、天竜川等で採取される黒っぽい礫を生き石とよんで区別しているが、この玉砂利は生き石の範疇に入る石質である。地山となる小笠山礫層中には見られない石質の石であることから海岸等から採集して城内に持ち込んだものと考えられる。

この玉砂利敷を取り囲むように灰茶色の丸礫が据えられて縁石列を形づくっている。つまり玉砂利敷遺構はこの縁石の内側を玉砂利で敷きつめてつくられているわけである。縁石に使われている石は小笠山礫層中に見られる砂岩の丸礫で、玉砂利とは色形状とも全く異なっている。大きさは長径10cm程度で、所々長径20cmほどの石も見られる。縁石は2列に並んでいる部分と1列の部分がみられるが、1列の部分は後世の攪乱で1列が失われと考えられ、当時は全体が2列に並んでいたと考えられる。また、2列が接している部分が多いが、東側の南北列は2列の間が7cmほどの間隔で離れている。石の据え方は石列の延長に対し、石の長軸方向が平行になるように据えられている部分と、北側の東西方向の列で見られる石列方向に対して石の長軸方向が直角になるように据えられている部分がある。

砂利敷の南側は削平されて遺構全体の形がはっきりしないが、北側には東西の2コーナーが残っていることから、本来は全体が方形をなしていたと考えられる。このことから、この玉砂利敷遺構は建物に関連する敷石遺構と考えられ、縁石列は建物の外壁が乗る石列と考えられる。玉砂利敷は石を揃え丁寧に敷きつめていることなどを考えると、これ自体が人の目に触れる意を意識してつくられていると考えられる。これらのことから、この玉砂利敷は建物内の土間のような部分に敷きつめられた玉砂利でないかと考えられる。

このような玉砂利敷の土間をもつ建物は極めて特殊な建物であったと考えられるが、具体的にどんな用途に使われた建物かは今のところははっきりしない。しかし、今後、他での事例が増えてくれば特殊な遺構であることから、かえって性格がわかつてくる可能性がある。

玉砂利敷の一部が楕円形に抜いている部分が何箇所かみられる。礫石の抜き取り痕の可能性があるがはっきりしない。また、この遺構の北側部分に3個の偏平な石が据えられている。形状から礫石と考えられるが、並びの間に少しずれがみられる。しかし、この3個の据え石の中心線を結ぶと玉砂利敷遺構の向きに方向がぴったりあっているので、玉砂利敷遺構と関連している可能性がある。

この玉砂利敷遺構及び礫石列の直上からは軒丸瓦と平瓦が出土している。軒丸瓦の瓦当には古い時期の巴文がつき慶長以前の瓦と考えられる。新しい時期の瓦が見られないことと、正保城絵図に近いと言わわれている国立国会図書館所蔵の横須賀城絵図のこの部分に建物跡が見られないことから、これらの遺構は近世前期以前の古い時期の遺構の可能性が高い。

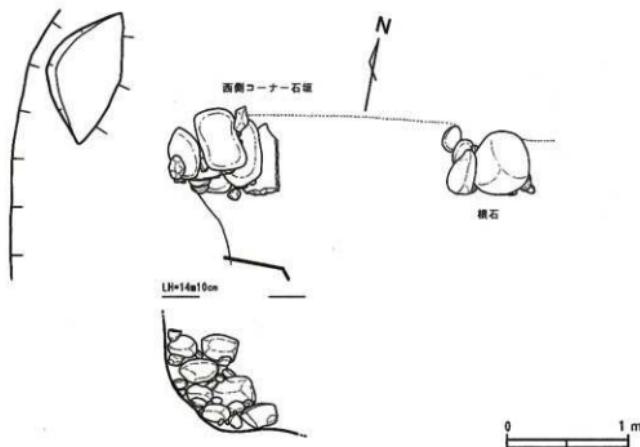
#### 玉砂利敷遺構北側石垣根石列

玉砂利敷遺構北側の本丸南斜面下場部分で、石垣の根石列を検出した。根石列は特に東側隅と西側

隅部分に良く残っている。この根石列の検出でこの斜面に石垣があったことが確かめられた。

東側隅部分の石垣根石列は、東端が基盤の小笠山疊層に食い込むように据えられている。石積みは2段目までしか残っていないが、全長は約6mの長さが残る。使われている石は小笠山疊層中に見られる灰茶色の緻密な砂岩丸疊で、丸疊としては稜線と面が多く、縦長で石垣積に適した形状の石である。長径は50cmから65cm平均で60cm横幅は30cmから40cmほどの大振りの石を使い。石垣の延長方向に対して石の長軸線が直角になるように据えられている。下段の根石は上段の石が前のめりにならないように根石の外側部分（手前側）を奥側より若干上げ、また、石垣の沈降移動を防ぐため根石の下に削り石を挟み込んでいる。また、根石と奥側の斜面（本丸南斜面）との間には拳大の丸疊がびっしり詰められている。これは石垣の裏込め栗石と考えられる。裏込め栗石はこの石垣斜面上部の本丸平坦面の1m下ぐらいまで分布していて、この部分の石垣が本丸平坦面に達するほどの高石垣であったことが確認された。

西側隅部分の石垣は西端から東へ1m足らずしか残っていないが、石積みは4段目まで残っている。石は小笠山疊層中に産する灰茶色の緻密な砂岩丸疊を使っている。大きさは40cmから60cmの縦長の疊で、横幅は25cmから30cmの石垣積みに適した比較的細長でごつごつとした感じの石を使っている。最下段の根石のうち最も東にある根石は割り取られた角の多い石を使っている。横須賀城の石垣ではこの様に加工した石はほとんどみられないで、石垣を積みやすいように加工したと言うより、石垣の間詰めや根石の支込み石に使う割石をとった石をたまたま使用したと考えられる。それぞれの石は偏平な面が上を向くように据えられている。この石垣の西端は地山の小笠山疊層を削ってつくられた西側の斜面状部分に接するように積まれている。正面から石垣の西端をみると石垣が斜面状の地山層に寄り添うように積まれているように見える。また、地山と石との空間には地山層と同じ組成でやや黒みを帯びた粘質の砂疊土が詰められている。この石垣を積むときに削り取った地山の土を、石を据



第39図 西側隅石垣平面図立面図

える時、間に詰めたものと考えられる。また、石垣石が移動しないように、石と石との空間には割り石や拳大の丸礫が詰められている。

この西側隅部分の石垣の東端と、東側隅の石垣根石列の西端との間は7 m 50 cmの長さがある。西側隅の石垣の東端から東に1 m 40 cm、東側隅の石垣根石列の西端から西に5 m 40 cmの位置に70 cmの長さで2石の据石が見られる。この据石はその据え方と位置から石垣の根石と考えられる。東西の石垣跡とこの石垣根石を結ぶとほぼ直線となるので、東西の石垣の痕跡と考えられる。東西隅の石垣の両端から石垣の全体の長さは14 m 40 cmを計る。

### 第3節 三日月池東側上段中段下段部分

#### 調査概要

この部分は平成7年度8年度に調査された。古絵図で見るとこの部分は前に述べた東大手から西に向かう道と2か所の門が描かれており、これらの遺構の検出を目標とした。

#### 炭化物廃棄土坑

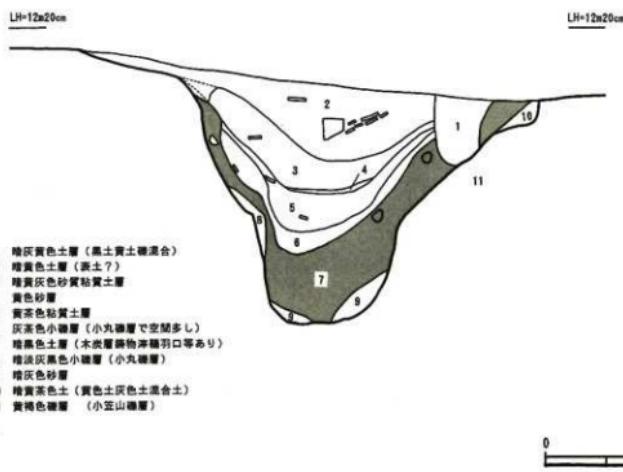
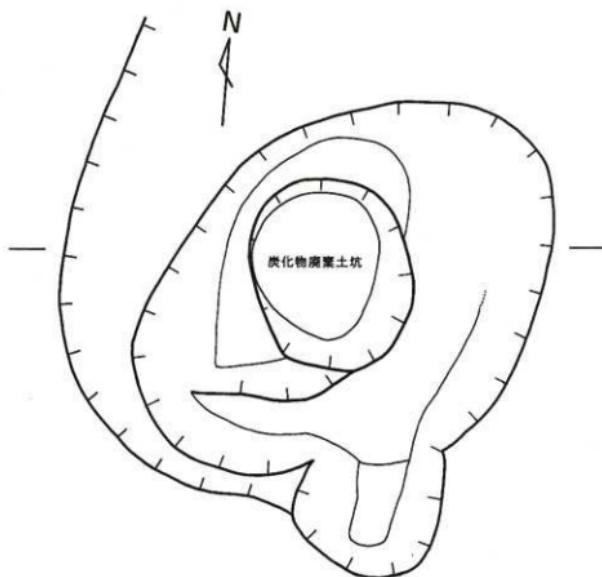
三日月池東側部分の最上段部分で、多量の炭化物が廃棄された土坑を検出した。この土坑は上部の直径がおよそ3 m、底部の直径がおよそ90 cm、深さは2 mを計る大きな土坑である。なお、この土坑は二重構造的な形をしている。掘方の堀り込み面が上部からおおよそ110 cmまでは緩やかに落ち込み、110 cmから底部まで急傾斜になりほぼ垂直に近い。この構造から緩やかな傾斜の大きな土坑の底部に、更に深い穴を掘って全体が形づくられたのではないかと考えられる。なによりもこの土坑を特徴付けるのは土坑内から多量の炭化物と鉄滓、更に繩の羽口が出土していることである。これらの遺物から鍛冶施設の存在が考えられる。この遺構の周囲にそれらしい遺構は検出されていないが<sup>1</sup>、この遺構から30 m程北側の天守台東下の平坦面で、炭化物が平面的に集中する部分がある。その部分に鍛冶施設の中心施設があり、そこからこれらの遺物が持ち込まれたと考えられる。土坑内の堆積物の体積状態を観察すると、底部に多少砂質の堆積物が見られるが、ほぼ直接、炭化物が堀方面と接して堆積している。また、炭化物層が底部から上部の縁部分まで堆積している。炭化物層の上部層は黄色土を主体とし瓦が混じる。この瓦は天守台やその周囲で出土する古期瓦と同じものである。のことと、正保城絵図に近いと考えられる国立国会図書館所蔵絵図によるとこの部分は道と門跡の推定地であることなどから、この土坑が埋め立てられたのは近世前期以前の古い時期ではないかと考えられる。なお、炭化物層中にもこの古期瓦が2点ほどみられた。また、炭化物の堆積状態からは井戸跡など長期間使用された遺構に廃棄されたものではないと考える。しかし炭化物の投棄だけのために掘られた土坑としても構造が特殊と考えられる。また底部から上部の縁部まで炭化物が堆積する状況は、炭化物を容器に入れて穴の底に投棄するのではなく、周りから搔き落としてその上を土で埋め立てたか、あるいは上部まで炭化物で埋まっていた土坑の中心を二次的に堀り込んで土で埋め立てたか、このような状況が考えられる。いずれにしても他での類似遺構との比較など今後のさらなる検討が必要である。

#### 石列据石遺構群

前に述べ土坑のすぐ西側で東西方向、南北方向に並ぶ幾つかの石列遺構を検出した。

この遺構群の南側は廃城後の耕作により削り取られて破壊され、高さ2 m以上の崖になっている。石列群の西側には、長さ35 cmから50 cmの細長の丸礫を石列の延長に対し石の長軸線が沿うように据えてつくられた石列がある。延長は1 m 10 cmを計る。この石列も南側が削られ全体ははっきりしないが、この石列の西側には遺構が見られないことから、この石列が、石列群の西端となっていると考えられる。

この遺構の1 m 50 cmほど東には東西方向を向く石列がある。長さ30 cm程度の細長い丸礫を石列の



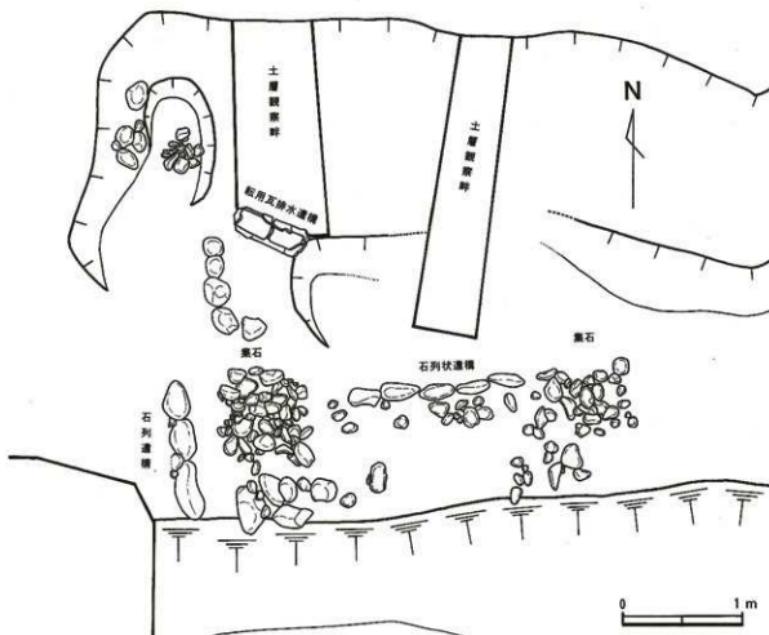
第40図 炭化物廻棄土坑平面図・土層図

延長に対して石の長軸線が沿うように据えている。全長は約1m50cmである。先に述べた西端の南北石列と東西石列との間には、東西60cm南北70cmのほぼ方形の形に拳大から径20cm程度の大きさの丸礫の集石がみられる。形から礎石の下の根固めの集石の可能性が考えられる。この集石の南側には、崖の上場線に沿って、5個程の石を据えた遺構が見られる。ほとんど崖から落ちそうな位置で西端の長さ40cmを計る最も大きな据石は南半が崖の外に出ている。この状況から遺構の大半が失われていると考えられるが、石の据え方から石敷遺構の一部と考えられる。

以上のようにこの部分の遺構群は残りは悪いが、この付近に推定される。東大手から本丸前の櫓門前に至る道や門跡の一部ではないかと考えられる。

#### その他の遺構

三日月池東側一帯は度々述べたように東大手から三日月池の北側をまわって本丸前の櫓門前に至る道部分にあたると推定され、門などがあった重要な部分と考えられるが、全体が廃城後の開墾と耕作により大きく改変されてしまっている。現在この部分は中央を南北に細い旧道、俗に言う赤線（おそらくこの赤線が当時の城内の道路で明治維新後の地租改正時に赤道となったと推定される）が畦道のように残り、両側に上中下3段の平坦面がみられる。この3段のうち特に中段部分については、東半部分等で多少の遺構は見られるもののほとんど地山層の上に直接耕作土が乗る状態になっていた。當時も多少の平坦面はあったかも知れないが、現在残る平坦面は耕作の用のため、段々畠状に削平されてつくられたと考えられる。平坦面はこのような状況であるが、斜面部分には遺構が若干残る。



第41図 石列据石遺構群平面図

特に東側の中段斜面下部分には、中央に柱の移動を防ぐための方形の穴を持つ礎石が出土している。この礎石は横須賀城では極めて稀な切り石を使っている。またその石材も北部山中に産する貝化石層を切り出して使っている。この化石層は产地が限られているので産出地が特定できるかもしれない。特に近世前半まで横須賀藩領であり、現在も2mから3mの厚さの貝化石層が露出する菊川町の西方地区の北部は有力候補地である。この礎石は東大手から本丸前へ至る門それも櫓門のような大きな門の礎石と考えられるが、この礎石のすぐ南は民有地で調査が出来ないので全体像は不明である。

## 第4節 天守台東下平坦面

### 調査概要

この部分の調査は平成7年度8年度におこなった。古絵図を見るとこの部分には何も描かれていない。ただ北の丸との境界付近に井戸と東側外周部分に堀が描かれているので、これらの遺構の検出を目標に調査をおこなった。しかし井戸跡はなかった、当時の絵図をみると井戸はこの帯郭状平坦面の東端部分に描かれている。この付近は約7m東下の三の丸跡に昭和40年代に建設された工場敷地造成時に大きく削られている事が分かっている。したがって、井戸跡はかろうじて法面に一部が残されているか、消滅してしまったと考えられる。

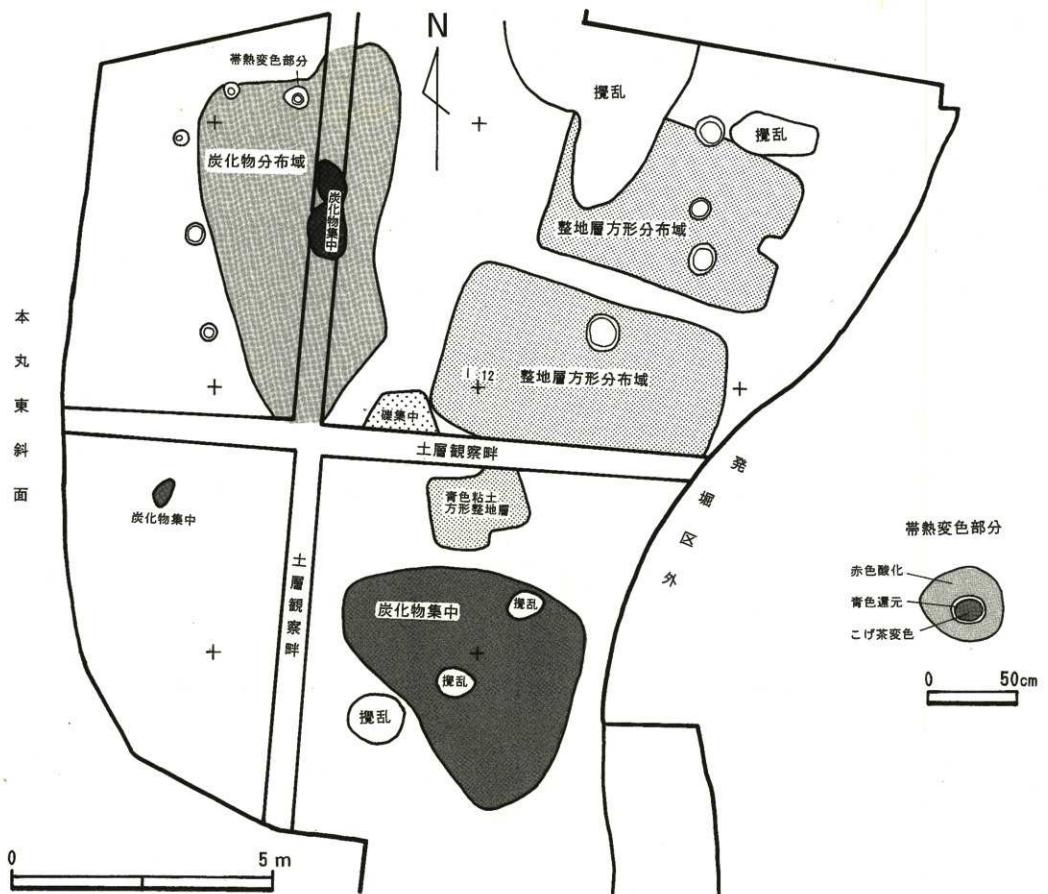
### 池状不明遺構

この遺構は調査区の中央やや北より部分で検出された。遺構は南北18m東西の幅北側で13m南側で2mの不成形の掘り込みで、深さは北側で140cmほど南側が中央で53cmを計る。この遺構は特に北側で表土層直下から多量の礫が集中して検出された事から、絵図に描かれた井戸跡が検出できたと一時喜んだが糠喜びであった。礫は横と下方に広がりを示した。石垣積みの井戸を構築する時、井戸を中心にすり鉢状に広範囲に掘り下げるが、この遺構はそれとも違う。この部分からは若干の瓦と陶磁器片が出土している。遺物の時期は18世紀末から19世紀のものである。

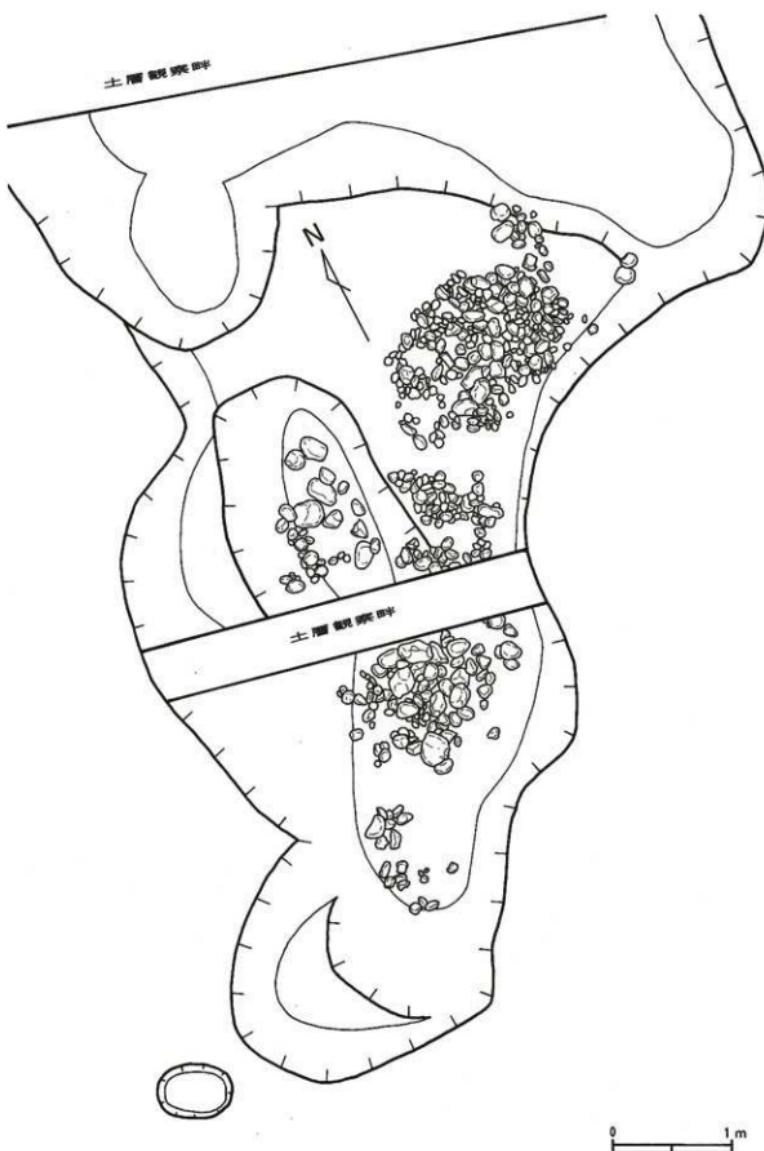
この遺構の南側部分は地山層を掘り下げて遺構がつくられている。地山層は不透水性の緻密な礫層であり、今回の調査でも遺構内に降雨の度に水が溜まる状態であった。また遺構の底部には礫が敷きつめられていて瓦も見られた。この状況と遺構の形状が庭園の池のように不成形である事から池跡の指摘があるが、明確な池の堆積物が見られない事と北側部分が下層まで埋め立て整地層で水が溜まる構造でない事等から池跡とはっきり断定できず、池状不明遺構とした。

### 炭化物集中部分

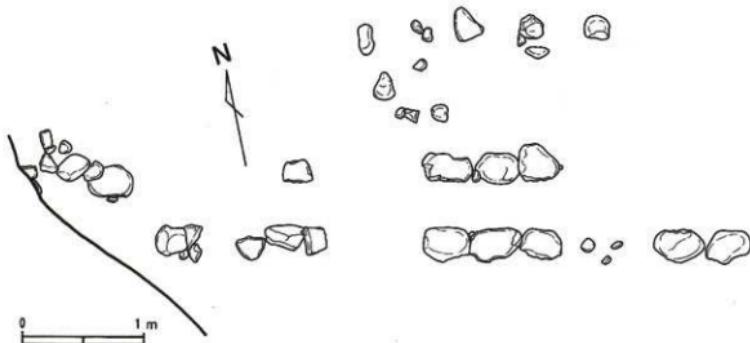
帯郭状の平坦面の南半特に西半部分には平坦面全体に炭化物が堆積していた。厚い部分で10cmから20cmの堆積が見られ、層中に鉄滓や褐色口がみられた。この事から、鍛冶遺構に関連するものである事は確実で、炭化物等が多量に堆積している事からこの部分附近に鍛冶跡があったと考えられる。この中で特に集中する部分が2箇所みられた。天守台南東斜面の下場部分に近い西北部分には、特に炭化物が集中していて、炭化物堆積域の北端には熱を受け変色した部分が見られた。この変色部は同心円状に土の色が3色にわかれていた。中心は径14cmあり、こげ茶色に変色した土であった。さらにその周囲が2cmほどの幅で青色に変色していた。これは、熱を受け還元状態に置かれて青変したと考えられる。更にその周囲が直径40cmにわたり赤色に変色していた。この事からこの部分に鍛冶炉があったのではないかと考えられる。またこの変色部から弧を描く様に、直径30cmから40cmのピットが4つ変色部から計って北の2つの間隔が130cm南2つが200cmの間隔で南に向かい並んでいる。このピットは鍛冶の覆屋を支える柱の柱穴の可能性が考えられる。ピットの深さは浅いもので9cm深いもので15cmをはかる。



第42図 天守台東下平坦面南半構造図



第43図 池状不明遺構底部礫出土状態平面図



第44図 溝状遺構実測図

この炭化物集中部分から6mほど南にも炭化物が顕著に集中する部分がある。地山層上に炭化物が直接乗る形で長さ4mほどの範囲に炭化物が堆積している。地山層と炭化物層が接している部分が変色しているようにも見えるが、地山自体が黄褐色で熱による変色かは断定できなかった。

#### 整地層方形分布部分

前述した鍛冶遺構と考えられる変色部の東側に方形に整地層が堆積する部分が3箇所南北に並んでいる。一番北側のものは東西が4m50cm、南北が3mの長方形の範囲に赤色土と小砂利、それと特殊なのは径1cmから2cmの細かく破碎された瓦片が混合されていて、突き固めたように固く固結して堆積していた。中間の遺構は東西5m、南北3m20cmを計る長方形の範囲に焼土と細かく碎いた瓦片を混合した土が突き固めたように固く固結して堆積していた。この遺構は北側の遺構と50cmほどの間隔でほぼ平行して並んでいた。この二つの遺構にピット状の穴がいくつか見られるが並びに規則性もなく柱穴では無いと考えられる。一番南側の遺構は北側の二つの遺構とはやや異っている。堆積する土も混合土ではなく青色粘土である。東西約2m、南北1m40cmをはかり大きさも小さく形も不正形である。これらの遺構は基盤層を10cmほど掘り下げて造られている。造り方が竪穴式住居跡の床面に似ている。極めて特殊な構造から特殊な用途に使われた遺構と考えられる。堆積土に焼土が混じる事から鍛冶施設に関連する遺構と考えられるがはっきりしない。

#### 溝跡遺構

天守東下の帯郭状平坦面の北端、北の丸との境界部分から検出された。長径40cmほどの長めの丸礫によりつくられた石列が36cmの間隔で2列平行に並んで溝を形つくっている。この溝は東西方向に延びている。北側の石列は途中に2ヶ所の途切れをはさみ、全長で4m40cm南側の石列は3ヶ所の途切れをいれて全長5mをはかる。溝跡遺構として全長で5m80cmを計る。

#### その他の遺構

その他この平坦面で検出された遺構として、用途不明の土坑が平坦面の北側域で検出されている。

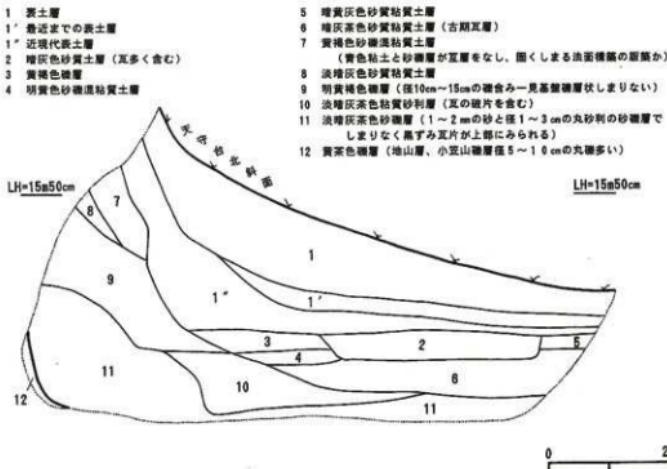
## 第5節 天守台北斜面下部分

### 調査概要と結果

今回の調査は平成9年度におこなわれた。この部分については昭和63年の北の丸の発掘調査に伴い西側端部分が調査され、西側の倉庫群のある平坦面から北の丸へ上がる門の一部と考えられる石列や古い時期の石積み遺構が検出された。調査の大きな目的は天守台の北側斜面に石垣はあったのか、なかったのかを見極める事である。この斜面は急斜面で度々崩落を繰り返していたので広範囲に調査する事は危険なため、3箇所にトレーンチを入れる調査に止めざるをえなかった。

トレーンチを入れた結果、石垣および石垣の根石は検出されず。天守台の北側に石垣が無かった事がたしかめられた。今までの調査で横須賀城の高い石垣は本丸前のそれも正面の櫓門周辺にしかないことがわかっている。櫓門周辺はこの城内でも最も目につく部分である。いかにも目立つ部分だけ石垣にした印象を受ける。なぜ一部だけの石垣にしたのかについては幾つか理由はあるだろうが、一番有力な考えは石材の確保の難しさである。横須賀城の周辺と横須賀藩内には、石垣に使える様な石材の産地がない、現在残る石垣も横須賀城が築かれている小笠山を形づくる小笠山礫層中に産する丸礫を使ってつくられているが、現在小笠山を水源とする各河川の上流域に足を運んでも、石垣に使用できる大きさの石はめったにない。当時もこの状況はあまり変わらないと考えられ、このことが石垣の構築を制限された可能性がある。

このトレーンチ調査の堆積土層の観察から、天守台の北側の特に西側のトレーンチは過去の崩落により土層が極端に乱れていた。そこで天守側斜面をおもいきって深掘削したところ、がちがちに固結して地山層と考えていた砂利層の中から複数の瓦片が出土し、整地層の固結状態に改めて驚いた。このことから、天守台の北側は本来の地山層の外側に分厚く（現状では下場線部分で1m40cmが残る）人工の整地層による法面が構築されていた事が判明した。



第45図 天守台北斜面下西トレーンチ土層図

## 第6節 遺物について

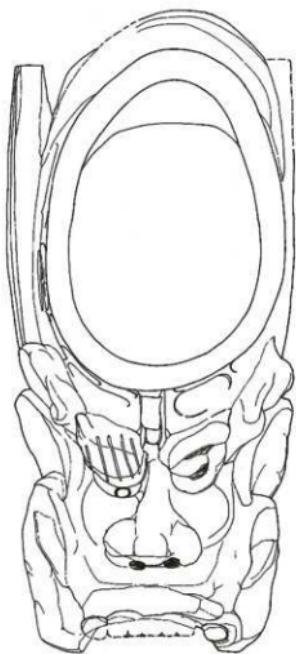
今回の調査が行われたのは、城郭の中心部で生活の場でない事から調査面積に比べ出土遺物の種類は少ないと、ただし瓦については多量の出土をみた、ほとんどはこれまでの調査で度々報告されてきた近世中期以降の瓦であるが、第1節で述べたように今回の調査では天守とその周囲で古い時期の瓦が多く出土している。これらの瓦の考察については、横須賀城の特に天守部分の変遷の大きな鍵となる事項があるので、他の城との比較研究をされている縦豊城城郭研究会の加藤理文氏に別項で詳しく述べていただいているので、ここでは、その他の遺物について概略を述べる。

### 1 鰐瓦頭部

この瓦は平成9年度の発掘調査で天守台の西側から出土している。天守台に隣接する瓦廃棄層から出土していることから天守に使われた瓦と考えられ、またその大きさから天守の大棟の両端に乗っていた一対の鰐瓦の一つと考えられる。瓦は鰐の頭部分である。ほぼ中央で前後に大きく二つに割れている。現在残る全高は42cm奥行きは底部で61cm、ひれを含む最大長64.6cm横幅は底辺で29cm、ひれ部分の最大幅31.4cmを計る。目から前の顔部分は高さ18cm奥行き24cmで全体からみると、いさか顔部分がひしゃげたような印象を受ける。鰐は想像上の動物で頭が虎で、体が魚とも龍とも各文献にある。建物の大棟に乗る鰐瓦の頭の造形は、龍形のもの虎様のもの魚様のものなどがある。今回出土した鰐瓦は龍をイメージした顔の造形と考えられる。目鼻等の顔の表現は立体的に表されている。各部分を具体的に見ると、目は眼球が立体的にとび出し、ほぼ中央に目の中心と瞳孔を表したと考えられるパイプ状の器具で押されて付けられた直径17mmのほぼ真円の円刻がある。眼球の上部は瞼と眉毛を兼ねたような膨らみがあり、眼球上部を被って半眼状の表現で目つきを観くしている。この膨らみには眉毛を表現していると考えられる先の尖った用具で描いた細い線書きが5本ある。なお、向かって右側の目は欠落している。その他顔部分の表現としては目の前面に鼻が立体的に表されていて、鼻の穴を示す直径16mmの穴が36mmの間に二つ穿たれている。目の後ろの両側面には耳が立体的に表されていて15mmの穴が穿たれている。この鰐瓦で特徴的なのは口にあたる部分の表現である。他の例では口を大きく表現するため側面奥まで深く口の切れ込みの表現がなされ、そこから牙や歯が出た表現がされている。横須賀城の鰐瓦でも作成年が入り幕末につくられたことがはっきりしている鰐瓦では、そのような表現がされているが、この鰐瓦は前面部分が下部分の幅で14.4cm高さ10cmの蒲鉾形に開いて口を表すと同時に、この部分に建物の大棟の棟木かそれに付属する部分がはまり込み、取り付ける構造になると考えられる。顔の後ろ側には長さ34cmのひれがあって4段に別れている。顔に近い部分から後側にかけて次第に広がっている。向かって左側縦に三つに大きく割れているが最上段の一部が欠けているだけで、ほぼ残っているが右側のものは後端部分が欠けている。全体には、幅6cmの馬蹄形の陰刻の施文が押され鱗を表現している。町内に寺院に他のタイプの2種類3体が残るがいずれも鱗が張りつけ式で、この瓦の鱗とは異なる。胴体の側面には直径7cmの円形の穴が開く、他の鰐の例から、ひれを取り付けるための穴と考えられる。また、上端部は大半が欠損しているが調整痕の残る端部がわずかに残っている。またこの部分の側面には組み立てのためのX印のような線刻がある。

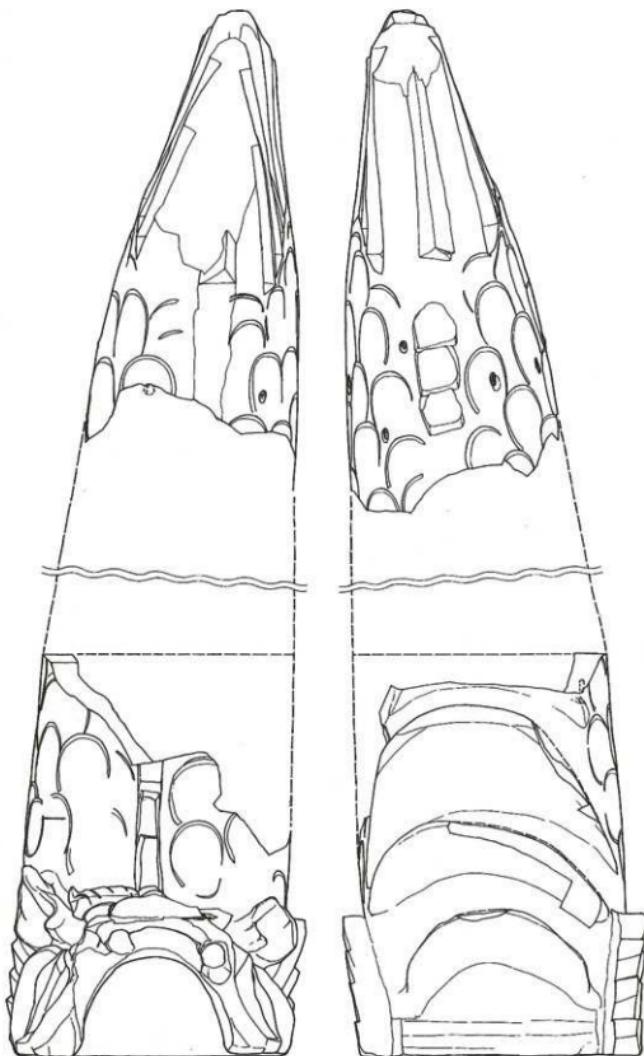
### 2 鰐瓦尾びれ部分

天守台南側の瓦廃棄層から出土した鰐瓦の尾びれ部分で、最大長54cm尾びれのつけ根の幅31cmを計る。上部が二つにわかれ魚体の尾びれを表現している。下端部はほとんど欠落している。全体に6.4cm～7cm幅の馬蹄形の陰刻の施文が押され鱗を表現している。両側面の下端部にひれを取り付けるためと考えられる穴の痕跡が若干残る。両側面のほぼ中央部分には横に並ぶような形で直径1cmほどの



0 20cm

第46図 鮫瓦実測図（上面図）

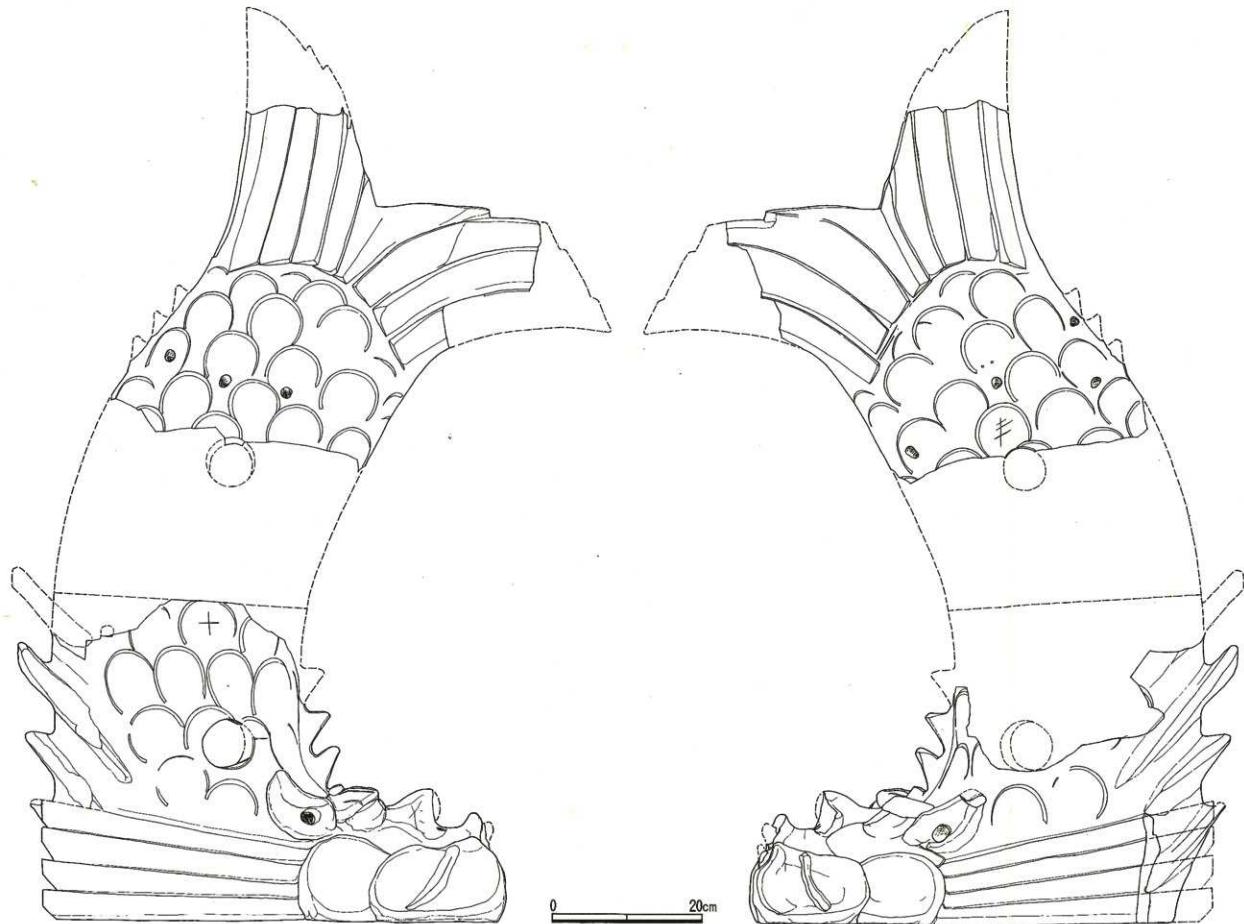


正面

背面

0 10cm

第47図 鮫瓦実測図（正面背面）



第48図 鱗瓦実測図（左右両側）

穴が合計7つ穿ってある。何のための穴かはっきりしないが、建物に鰐瓦を取り付けた時、針金状の物や釘で補強したりする場合に、その留め具を通すための穴ではないかと考えられる。

以上のようにこの瓦と前に述べた鰐瓦の頭部分は、鱗などの表現方法が同じで、瓦の胎土も同じと考えられ、ほぼ同時に作成された物と考えて良く、前に述べた頭部分と組まれていたものか、もう一対の鰐の尾ひれ部分と考えられる。この鰐瓦は頭と胴体と尾と大きく3分割されているが、現状では胴体部分が残っていないので、直接組み合せて1つの鰐とは言えない。しかし、実測図面にあるように、図面上で復原してみると推定全高121cmを計る。

### 3 その他の遺物

前にも述べたが今回の調査部分は城郭の主郭部分であり、瓦以外の遺物は殆ど出土しなかった。

## 5章 まとめ

今回の事業は横須賀城跡が昭和56年に国の史跡指定を受けてから最大の事業である。この事業により天守台や本丸前など横須賀城跡の主要部分の発掘調査がおこなわれ、天守台の礎石建物跡、本丸前の高石垣などの重要な遺構が検出された。特に、天守台からは城郭のシンボルである天守と考えられる礎石建物跡が検出されたことは、大変重要なことである。横須賀城は明治維新の廢城後、様々な土地利用がなされてきた。このことから平坦面の遺構の残りは悪く、建物跡が遺構として捉えられることが少なかった。特に天守台は見晴らしの良い公園として様々な利用がなされ、この事業が始まるまで天守台にあった戦没者慰靈のための忠霊殿の建設時には、大規模な削平がおこなわれたとの証言があり、天守建物の検出は難しいのではないかとの意見も多かった。そんななか北側部分が失われた状態ではあったが、礎石建物跡が検出できたことは大変大きな成果であった。

このように今回の事業により大きな成果があがり、城跡の解明が進んだが、特殊な構造の天守台や他での類例の少ない玉砂利敷遺構や鍛冶遺構と考えられる炭化物集中部分の検出など、特異な遺構も多く出土し、今後も解明検討していかなければならない新たな点もふえた。今後も横須賀城の遺構の解明が進み、城郭研究の良い例となるよう望みたい。また、これら発掘調査による成果に基づき天守台の建物跡の平面表示や本丸前の高石垣の復原整備などの整備事業も大きく進んだ。これにより史跡としての見学者の利便の他に、大須賀町民のみなさんからも、憩いの場、町シンボルとしてますます親しまれ、また、活用がなされていくものと信じます。

### 主要参考文献

- 大須賀町教育委員会 1984 『史跡横須賀城跡－保存管理計画策定報告書』  
大須賀町教育委員会 1985 『史跡・横須賀城跡－復原と環境整備のための基本計画』  
大須賀町教育委員会 1993 『史跡横須賀城跡Ⅷ・Ⅸ－平成3年度・4年度保存修理事業概報』  
袋井市教育委員会 1990 『久野城跡－平成元年度基礎資料収集調査概報』  
袋井市教育委員会 1991 『久野城跡－平成2年度基礎資料収集調査概報』  
袋井市教育委員会 1992 『久野城跡－平成3年度基礎資料収集調査概報』  
豊織期城郭研究会 1994 『豊織期城郭の瓦』  
掛川市教育委員会 1998 『掛川城復元調査報告書』  
高梁市教育委員会 1997 『史跡備中松山城一本丸復元工事報告書』  
市原市教育委員会 1998 『史跡上総国尼寺跡－中門・回廊復元事業報告書』  
磐田市 1977 『国史跡旧見付学校々舎修理工事報告書』  
森下春美 1991 『地域史研究と「日本史」～横須賀漆関係史料の教材化～』  
(静岡県立横須賀高等学校研究紀要 NO13抜刷)